

いわみじょうあと
石見城跡 発掘調査現地説明会

令和5年12月9日(土) 10:00～12:00
京都市文化市民局
文化芸術都市推進室 文化財保護課

1. 石見城跡について

石見城跡は、京都市西京区大原野石見町に広がる遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）です。善峰川の南岸にあたるこの地域では、弥生時代（2世紀頃）から人々が集落（ムラ）を作り、暮らしてきました。また古墳時代中期（5世紀頃）には、前方後円墳を築く力をもった首長が治める土地であったことがわかっています。

室町時代（14世紀後半～16世紀）には、この地域は広く「西岡」と呼ばれ、「西岡被官衆」と称される複数の小領主が、連帯して治めていました。彼らは室町幕府の側近と強く結びつくことに

より勢力を強めていったと見られています。被官衆は、それぞれが治める地域に城や館^{やかた}を築きました。そのうちのひとつが石見城です。

応仁元年（1467）、京を揺るがす大戦争である応仁（・文明）の乱が始まると、西岡被官衆は細川勝元が率いる東軍に属して戦いました。しかし西岡被官衆の中から西軍へ味方する武将が現れたため、一帯は激しい戦火につつまれました。

文献史料によると、石見城は文明2年（1470）に寺戸城主であった野田泰忠の攻撃を受け、善峰川の対岸にあった上里城と共に焼失しました。以後、石見城の情報は途絶えてしまい、その実態は謎に包まれたままとなりました。

2. これまでの調査成果

平成16年（2004）、都市計画道路中山石見線の建設に先立つ発掘調査が行われ、鎌倉時代～室町時代（12～16世紀）の建物跡が多数発見されました。このうち室町時代前半（14～15世紀）の建物の主軸が、東側にある高まりや窪みの方向と揃うことから、これらが石見城の土塁や堀である可能性が示されました。

令和3年、京都市は石見城の構造を明らかとするため発掘調査を開始しました。その結果、現在残る地形の起伏が鎌倉時代～室町時代に築かれた土塁や堀の痕跡であることが確実となりました。特に高台の東側では土を削って土塁状に盛り上げたことが確認でき、城を築くために地形を大きく改変したことが分かります。また高台の西側でも人々が生活した痕跡が見つっています。

3. 今回の発掘調査成果

今回の調査では、平成16年度に発見された建物群の広がりをつかむため、高台の西端に調査区（1区）を設けました。また、高台の周辺に外堀が存在するかどうかを確認するため、高台北側の畑地に調査区（2～4区）を設定しました。

調査の結果、1区では、鎌倉時代（13世紀）の溝と井戸、室町時代（14～15世紀）の柱穴と溝を検出しました。これにより建物群がさらに東へ広がることがわかりました。また2区・3区では、高台の裾で大型溝を確認しました。高台を囲うようにのびることから城の外堀と考えられます。さらに2区では、人頭大の石を並べた石塁を発見しました。河川の氾濫や敵の攻撃に備える施設であったと考えられます。このほか、古墳時代（6世紀）の竪穴建物もみつかりました。



図1 調査位置と周辺の遺跡



図2 西京区及び周辺市町の主な城跡

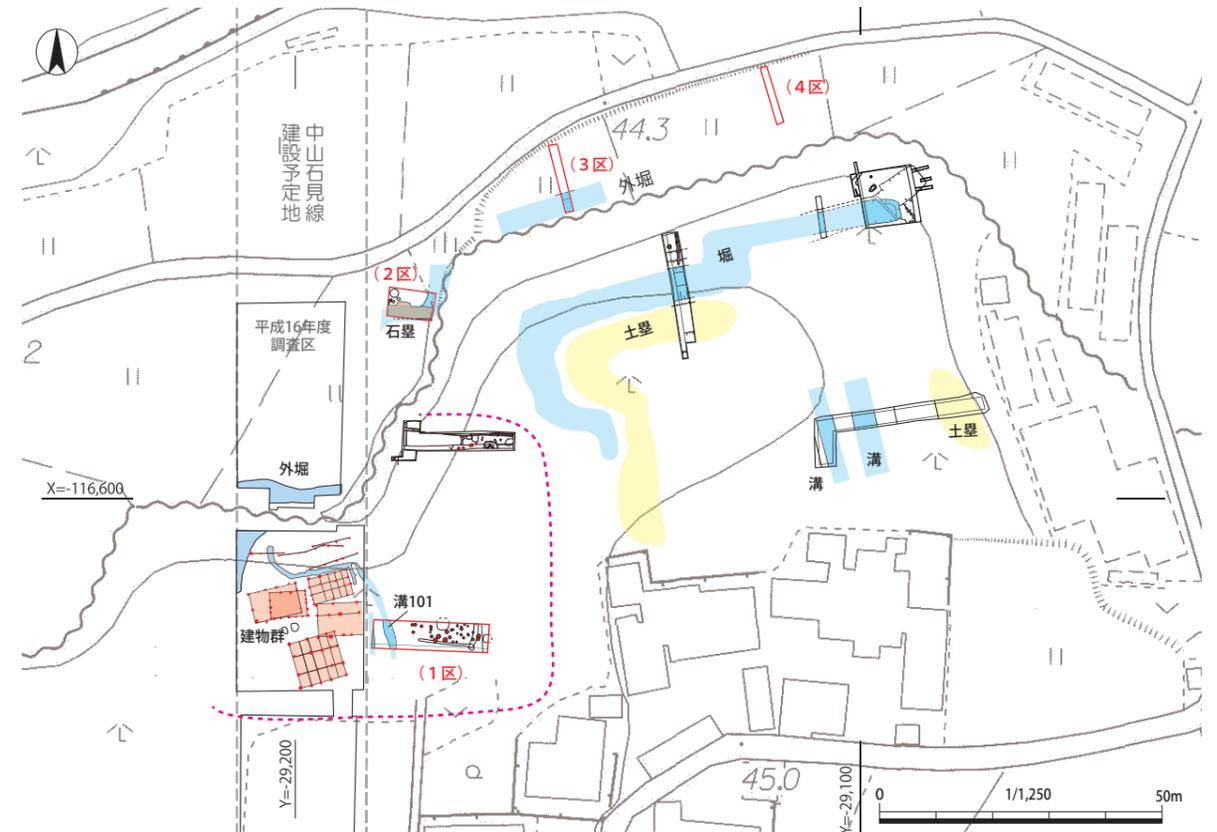


図3 調査成果接合図（室町時代 14世紀～15世紀）

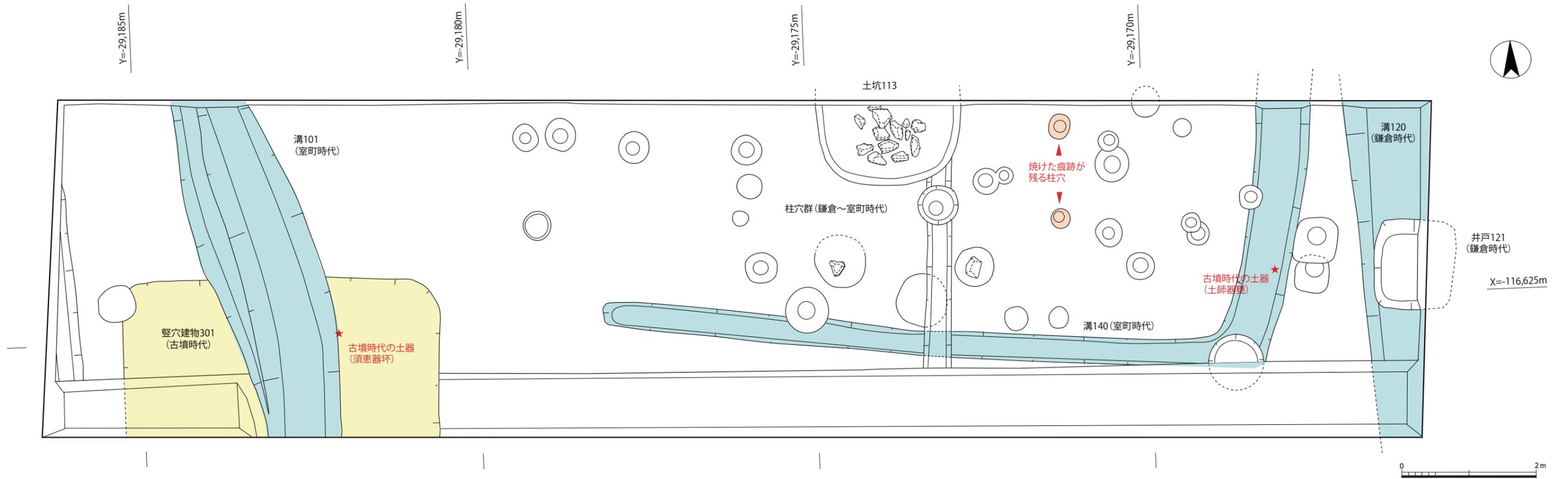


図4 1区遺構面全体図 (古墳時代・鎌倉時代～室町時代)



図5 2区遺構面全体図 (鎌倉時代)



写真1 1区遺構面全景 (東から)



写真2 2区遺構面全景 (北東から)